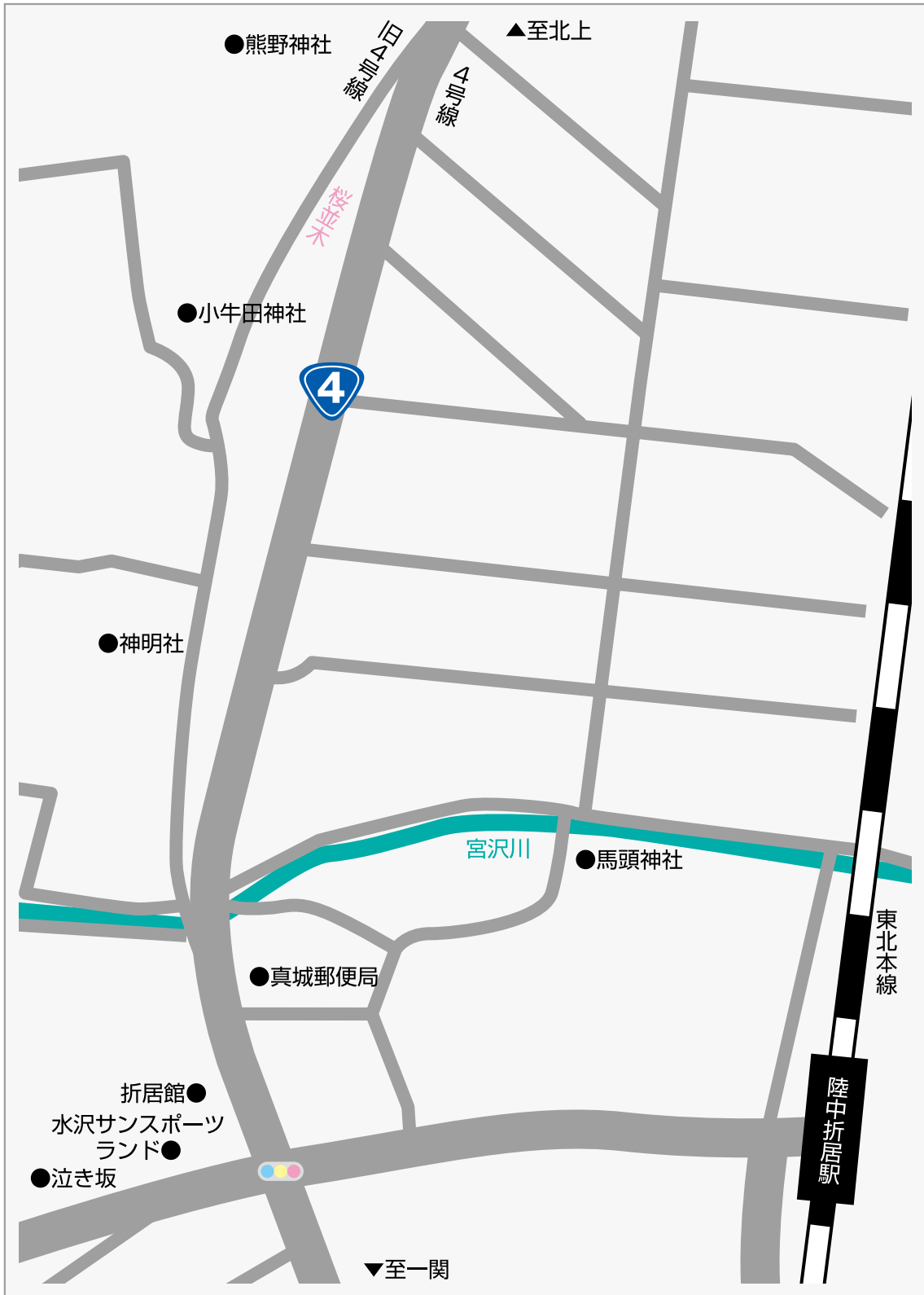


# 折居・要害なるほど散策

2006.7.23



奥州街道の桜並木



## 折居・要害概要

安永風土記によると、折居・要害・中林は中野村端郷折居に属しています。

### 中野村（全）

- 田代 291貫904文 畑代 29貫文 都合 320貫904文  
内 ○200貫738文—御蔵入  
○120貫166文—御給所
- 家数 238軒 ○人数 1177人 男668人 女509人
- 屋敷数 65（本郷31、124軒 端郷34、123軒）

### 端郷折居（折居・要害・中林）

- 神社 神明社（折居）雲南権現社（宮沢）白山社（大南）
- 仏閣 観音堂（中林）
- 古館 折居館（中崎）本丸南北23間 二ノ丸南北18間  
東西13間 東西16間  
※北大門の記述あります。
- 坂 折居坂 長さ壺丁式拾四間 北大門と折居（下居→折居）の記述
- 清水（2ツ）清水大門、馬籠清水
- 屋敷名 主な屋敷 街屋敷24軒 要害屋敷13軒 中林屋敷8軒など

### 現在の字名

折居町・堤が沢・土手根・町下・宮沢・中崎・要害・八反町・谷地

### 折居、要害の歴史

折居—平泉藤原時代、北大門（下居→折居）警備の兵士が住む館（堤が沢）

陸羽街道沿いに住居、天正年間柏山氏の四男明胤（折居宮内）が中崎に折居館を築きましたが、まもなく滅亡。

江戸時代中期（1730頃）栗林初代鈴木権内茂仁氏が折居の高札場附近に隠居分家し繁栄しました。奥州街道が整備され、中林へも段丘の中腹（旧国道）を通れるようになりました。段丘下（街下、谷地）の開発が進み人口も増え端郷折居（折居・中林・高根）となりました。折居は当時「街」と言いました。「真城村大字中野字街」更に「真城字折居町」となりました。

要害—天正年間折居館がつくられた時、整備された地区と思われます。

中林—中林地区の段丘上に中林遺跡があります。9世紀中頃（860頃）のもので竪穴住居・道路・<sup>おかぼ</sup>陸稻などの遺構が発掘されました。

※折居地区の段丘下を通る国道ができると、土手根、町下に工場・商店ができ更に発展しました。

要害地区は陸中折居駅ができると駅前が発展しました。

## 大門清水と 言われた所

胆沢扇状地の突端のこの地区は、各地に清水がわくところですよ。

大門清水とは、北の大門の別名として使われています。水沢市史には、今でも折居地区の水源地であると書かれていますが、場所は特定できていません。

## 北の大門と地名の由来

平泉藤原氏の頃、南と北に大門を建てたと言います。南大門は一関市花泉町金沢で、北の大門は折居に建てたと史書にあります。みちのくの街道を通る人々で馬や籠に乗る人は、ここを通る時わざわざ乗り物からおりて通ったと言われています。この大門には清水も湧くことから、大門清水と言われました。

「平泉雑記」には、「この大門は胆沢郡下居と言う所にあり、人々馬や籠から下りて通ったので下所と言ったのをオリ居と言い、折居になった」とされます。

その後の時代の大門に、関所と言われる機能をもつようになったのかは不明です。

## 歴史の道と坂の道

折居地区には、歴史に裏付けられた坂の名前がたくさんあります。  
折居坂・熊堂坂・病院坂・隠居坂・バッカリや泣き坂等・・・。



### < 泣き坂伝説 >

昔、胆沢の里に長者がいました。その妻は強欲で、終には大蛇になって近くの沼の主になり、度々洪水を起こして村民を困らせました。村人はこれを鎮めるため、若い娘を生け贄にしておりました。ある年生け贄の番になった家には娘がおりませんでした。遠州小夜の中山というところに孝行娘がおり、この話を聞き、母親の目を直すために身売りをしました。健気な娘は折居まで来た時、自分の定めを嘆いて坂を登りながら泣き、南都田の化粧坂へと向かったのです。(「掃部長者伝説」)  
…泣きながら登った坂が泣き坂と呼ばれ、それが中崎と変化していったのでしょうか？



## 防空壕跡 (中崎・折居)



太平洋戦争も終戦間近の昭和20年(1945)8月、折居駅付近に空襲があり、駅と機関車が弾丸を浴びました。真城までも攻撃を受ける恐ろしい事態になり、人々は身の安全を考え各地に防空壕を造りました。が、この辺りのものは国策で造られたもので(中崎1カ所、折居2カ所)、折居駅が近いことから、小山飛行場で使う物資や燃料庫等に使用されたものですが、間もなく終戦をむかえ、あまり使用されませんでした。

今では、平成16年(2004)神奈川県横浜において、小学校裏山の朽ちかけた防空壕で遊んでいた子どもたちが事故に遭うことがあり、全国的に防空壕の点検、安全対策が指示されました。このことにより折居の防空壕も、蓋をするなどの対策がとられました。

## 折居館



戦国時代末期の天正年間(1572～1591)初め頃、胆沢地方を治めていた柏山家十三代柏山明吉が、四男明胤に知行二百貫を与えて「中崎」に分立させましたが、天正年間の激動の中、末期には滅びた山城です。

分立した明胤は、折居宮内明久と名のり、柏山本家(明宗)や兄(小山九郎)と共に活動しましたが、奥州仕置軍に破られ、奥州一揆(天正18年10月)を経て、柏山一族と共に秋田の増田に逃れました。

その後、柏山一族は十五代明助を中心に団結し、和賀地方に戻って南部陣営に加わり転戦しました。そして、慶長6年(1601)の\*岩崎城の戦いで戦功をあげ明助は岩崎城主となりましたが、子がなく柏山氏は断絶しています。

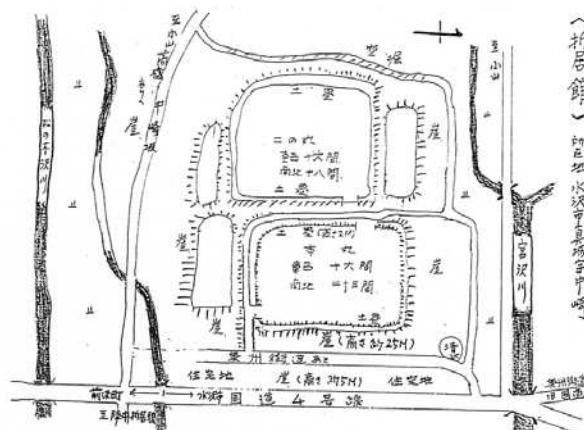
折居氏(嘉兵衛)は、寛永9年数々の戦功により南部藩士に取り立てられ、北上市近辺に多くの子孫を残しています。万治2年(1659)没、行年83歳。

折居城跡は、昭和30年代から40年代にかけて東北本線の複線化工事や国道のバイパス工事等の土取り場となり、完全に消滅してしまいました。現在は、工場、サッカー場、野球場となっています。

なお、土砂の中に直径5cm前後の黒曜石が多数見つかっています。

### \*岩崎城の戦い

豊臣秀吉の奥州仕置に反発した和賀氏や稗貫氏は、和賀・稗貫一揆を起こしましたが鎮圧されて領地を没収され、その領地は南部氏に与えられました。没落した和賀忠親は、伊達政宗の保護を受け胆沢郡平沢の地を与えられていましたが、慶長5年(1600)に領土拡大を企てる伊達政宗に扇動され、旧領奪回を目指して南部氏に対して反乱を起こしましたが、最終的には岩崎城に籠城して南部軍を迎え撃つ態勢となり、激戦の末ついに陥落してしまいました。



## 折居館(折居城)

村誌編集資料  
高橋次三氏

## 陸中折居駅



駅舎の「壁板」が、真城公民館に贈られました。この被弾は、昭和20年（1945）8月10日、折居駅が米軍戦闘機に襲撃された機銃弾の跡で、壁板を貫通した四つの穴がくっきりと残っています。

昭和55年（1980）には、日本全体が車社会になったことや貨物の減少で鉄道の利用が減り、駅は無人化となりましたが、地区の人たちの協力で、現在まで環境が整備され守られています。

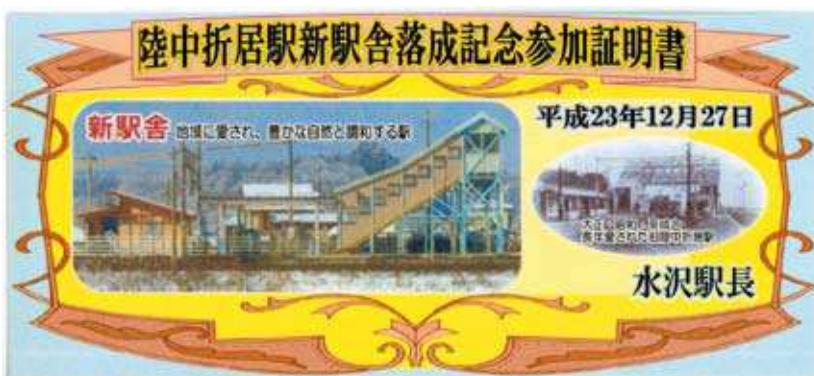
平成23年（2011）東北地方太平洋沖地震をはじめ度重なる余震により、陸中折居駅の待合所が甚大な被害を受けました。そのため同年に既存駅舎撤去跡地に新駅舎を建設しました。それを記念して12月27日（火）陸中折居駅落成記念行事が行われ、当日参加されたみなさんに陸中折居駅舎落成記念参加証明書が渡されました。その中には、「地域に愛され、豊かな自然と調和する駅」とあります。いつまでも、そういう駅であり続けるよう守って行きたいものです。



写真提供:千葉幸二さん（堤尻）



四つの穴がくっきりと残っています



## 馬頭神社

折居駅に近く、現在は要害地区の集会所にもなっている馬頭神社。

馬の産地であった岩手県（南部駒）は、農家のほとんどが馬を飼っており、農作業や荷物の運搬など馬と共に働きました。

そういったことにより、人と馬は一体であったと思われ、馬に感謝する気持ちと仆れた馬の供養に、馬頭観音の石碑や神社が建てられました。



↑にんじんが供えてあります





## 奥州街道の桜並木

街道は時代と共にその位置が変わります。

昔、西の山の尾根を通った道は次第に平地近くなり、安倍道、安倍貞任を追う源義家が通る小山付近から、平泉藤原時代の北大門があったとされる折居より西に登り、折館大深沢へとつながる古坂へ変わりました。(陸羽街道)

江戸時代になって駅(宿場)が確立し、今では桜並木の景色が残っています。

## 神明社

お伊勢様とも言われ、柏山一族の三男明長が千葉九郎と名乗っていて勧請したともあります。(千葉九郎のほかに小山九郎の名前もありますが詳細は不明です)

また神明神社は、折居部落の産土神(氏神さま)と言われています。産土神とは、一族の連帯と団結を表す神です。

## 病院跡付役場跡

この辺りには、病院がありました。病院坂という俗称が残っています。

病院の近くには役場もあり、明治元年(1868)になると、行政組織も変わり行政区として村がつくられる中、折居にも村役場が置かれました。また、この時代は行政機構も度々変更されていました。役場は、その長に任命された人の住宅が役場で、戸長役場と言われたりしました。

## 小牛田神社と折居小学校跡



小牛田神社は旧奥州街道沿いにあります。この街道は、明治維新の戊辰戦争時に、函館へ向かう大砲を積んだ荷馬車が登ったと言われており、今もその面影を残した貴重な道となっています。

また、この小牛田神社には、折居町の大関男山が世話人となって、谷風一門と建立した伊勢の海の石碑があります。

明治時代になると教育の重要性が認識され、子どもたちの教育のため各地に学校が造られました。小学校は住民人口600人を基準にして学区を定め、真城地区にも多くの学校が造られ、一学期を6ヶ月間として6歳から14歳までの子どもたちが勉強に励みました。

折居の小学校は児童数が30人で、その時の住民人口が1626人との記録が残っています。その後度々の学制改革で義務教育制になり、全ての子女が等しく教育を受けられる世の中になりました。

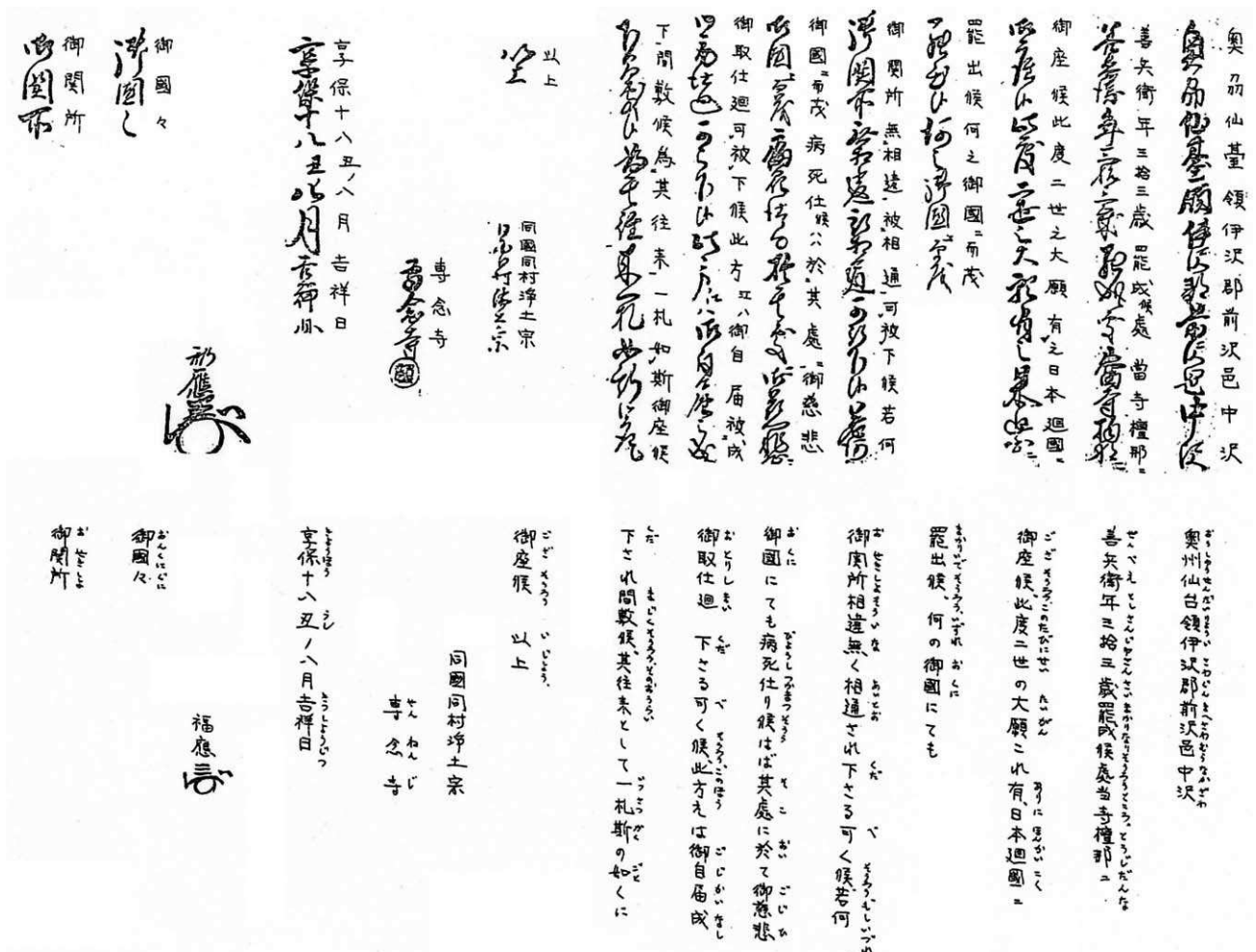
# 江戸時代 開所(大門)の 通行パスポート

関所を通るには身分証明書が必要でありました。当時はお寺や神社が檀家や氏子である住民の身分を証明し発行しました。

その身分証明書には、道中にもし事故があり死亡した時には、お慈悲をもってその土地で処分してくれることをあらかじめ頼んでおり、昔は、命を懸けて長い期間の巡行に臨んでいた様子が伺われます。

次に江戸時代のものがありますので参考までにご覧下さい。

## 江戸時代の身分証明書



資料提供 胆沢区「胆沢古文書研究会」